

風神と雷神：天と地の間を司る風の神様

一般社団法人 洗楓座
一般社団法人 e f c o . j p

代表理事 佐藤建吉

風神雷神は、屏風絵として教科書でも紹介され、日本人にとっては、身近である。したがって、日用品にも多く取り入れられている図柄である。海外旅行の際に日本土産として、私が持参するアイテムの一つでもある。今年5月に三重県伊勢市でG8首脳会議が開催されるが、2008年の北海道洞爺湖でのG8サミットでは、依屋宗達

の風神雷神図屏風が飾られたホテルの一室で会議がなされたという。それは、風神雷神のアイコンが作用した結果である。と、想像される。

さて、風神は、風の神であり、風を司る神である。日本の風土に根差し、神として、雷の神、水の神、海の神、火の神など、花鳥風月に神がいる。八百万の神といわれる。八百万の神といわれる。八百万の神といわれる。八百万の神といわれる。

277年の古寺で、天と地の間に横たわる大気・生気・風力を司っているという。案内には、「当社には、風の神様、始まりの神様を奉斎す。」とある。また、風の神様

を祀りして、日本に風の根源的な大切さを説き、伝えていく存在である。その分社には、1618年に遡る岐阜県中津川市阿木の風神神社がある。この神社には、風が一年中噴き出す風窟があると

もう少し龍田大社の由来を述べると、天地五行、すなわち陰陽五行の思想を拠り所として、天と地に存する「木火土金水」の五つの要素(元素)についての説法がある。「火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ず」という好循環(相性)のほかに、「水は火に勝(剋)ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝つ」という制御の循環、すなわち、牽制(相克)もある。

こうした循環が自然に根差した規範として考えられる。その思想においては、木(東)、火(南)、土(中央)、金(西)、水(北)を指し、同じく、木(春)、火(夏)、土(土用)、金(秋)、水(冬)、そして、木(朝)、火(昼)、土(午後)、金(夕)、水(夜)など、五つに割り

当てられる。こうして考えると、一日、一年、そして一生の暮らしは五行として重ね理解することができる。

私たちの暮らしに必要なエネルギーもまた循環である。ここで、科学技術の言葉を用いることは、違和感があるが、ワット(W)という単位は、1秒(s)当たりのエネルギーや仕事の大きさ(ジュール、J)であり、1W=1J/sである。それは、単位時間当たりのエネルギーの流れ、流動、あるいは、勢いを意味している。自動車や電車が走り、そして飛行機が飛ぶのもエネルギーの流れがあつてのことである。ただのエネルギーの滞留は、エネルギーの大きさ、すなわち、ポテンシャルとしては意味づけられるが、この瞬間の動きは説明できない。今を生きるためには、流動性こそが求められる。

風神の絵では、背中にある風袋の端を手で握り、そこから排出される空気の勢い(ジェット气流)を調整している。それは、風神の浮上の原理であり、反動としての風力の調整、世の中への脅威と畏敬を表象している。

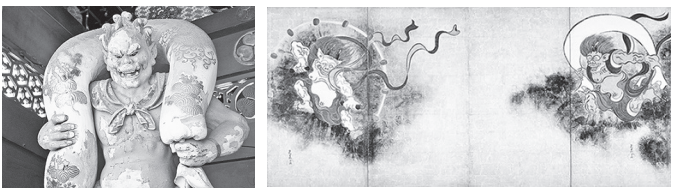
それを司る神の存在を意識し、関連する八百万の神の采配とそれに帰依する私たち人間の存在を大切にしたい。

風力発電の現況は、その「気」の表れでもある。「風車はメディアである」といわれるように、風力が元気がどうかは、風車を見ると明確である。風車がたくさん回るように、風神様に、この国の風潮や気を変えてもらいたい。

「金の季節の秋、「風の神」の本宮である龍田神社の地は、紅葉の名所で、百人一首には「首も詠まれてる。」

風吹く三室の山のもみじ葉は龍田の川の錦なりけり
(能因法師)

ちはやぶる神代も聞かず
龍田川からくれないに
水くぐるとは
(在原業平朝臣)



日光山輪王寺大猷院の風神像(左)、 俵谷宗達作の風神雷神図(右)